

【資料】

工場閉鎖だ！

——アメリカ産業界を変革した偉大な坐り込み
ストライキ——

井 上 昭 一

はじめに

本資料は、Stephen W. Sears, *Shut The Goddam Plant! — The great sit-down strike that transformed American industry— American Heritage*, April/May 1982 を抄訳・紹介したものである。

稿者は、工場閉鎖を闘争手段としたGMの労働組合の成立過程を当時の大量生産工業の発展、その中での労資の対立(矛盾)の激化、アメリカ労働総同盟(AFL)と一般産業労働者との不調和を背景にしなが、労働者の自発的な、同時に社会的・集団的な闘争(坐り込みストライキ)の展開のなかで浮彫化し、GMを追い詰め、ついに組合の承認を勝ちとって行く過程に照準を合わせて、きわめてヴィヴィッドに論及している。

当時としては階級的な労働組合である産業別組織会議(CIO)系の全米自動車労組(UAW)の役割と位置づけ、さらに全国労働関係法(いわゆるワグナー法)という政治的成果の獲得の上に展開される労働運動、換言すれば、不熟練労働者を中心とした「下からの力」とワグナー法に代表される政治的成果たる「上からの力」とが結合して、オープン・ショップ制をとる自動車工業界、その中でも最大企業のGMに組合を承認させた意義は大きい。その意味からして、後世において「アメリカ産業界を変革した偉大な坐り込みストライキ」、*「20世紀史上、アメリカ労使間のもっとも記念すべき重大な*

対決」と評価されるのも当然といえよう。

本稿では、とくにフリント市の車体工場を中心とした坐り込みストライキの過程で、労資の攻防——資本家・経営者側によるスパイの活用、司直への訴え、さらには軍隊の動員要請とそれらに対する労働者の徹底抗戦——、ミシガン州知事やルーズベルト政府の調停作業などが随所に織り込まれている。資本の専制を否定する運動の大きな契機となったGMの坐り込みストライキの描写は、その後のアメリカ労働運動史を研究する者にとって、興味尽きせぬものがある。

〔I〕

ミシガン州フリント市にあるGMのフィッシャー・ボディ第1工場——世界最大の自動車車体製造工場——での出来事。それは凍てつくような冷たい冬の日の夕方であった。突然、一条の明るい赤い光線が、同工場の正門から通りを横切ったところにある全米自動車労組（UAW）の組合ホールの窓でパッパッと点滅しはじめた。それは組合の緊急会議の合図であった。

24時間作業工場の午後交代番（通例午後4時から深夜12時まで）の労働者の夕食休憩時間であり、興奮した労働者たちがホールに集まってきた。UAWのオルガナイザーであるロバート・C. トラヴィスは巨大な工場に広まっている噂——自動車ボディ板の型をとるプレス用ダイスが同工場の引き込み線の貨車に積み込まれて持ち去られる——を確認した。その2日前、仲間の組合員がクリーブランドのフィッシャー・ボディ工場にストライキに入ったことを、トラヴィスは組合員に想起させた。次にフリントの工場が襲われることを恐れたGMは、重要なスタンピング用ダイスを他の工場に移転させようと試みていた。

「ところで、この点に関して我々はどうすべきなのだろうか？」とトラヴィスは尋ねた。

「それらは我々の仕事だ」と、1人の男が叫んだ。

「我々は、それらを、まさにここフリントに残しておくことを希望する」。

これに対して、期せずして賛同の声があがった。

「では、諸君はどうすることを望むのかね？」トラヴィスは問うた。

「閉鎖だ。いまいましい工場の閉鎖だ！」瞬時にして、組合ホールは喝采の渦と化した。

夕食時間が終わると、労働者たちはフィツシャー・ボディ第1工場に戻っていった。始業合図の笛が吹かれたとき、トラヴィスは組合ホールの前に佇立しながら、心配そうに見守っていた。いつもの機械の音はせず、ただ静寂さだけがあった。長い間、何も起こりそうになかった。その時、3階の窓が勢よく開いた。1人の労働者が窓から上体を乗り出しトラヴィスに向かって勝ち誇ったように手を振り、そして大声を發した。「ダイスは我々のものだ。」

かくして、1936年12月30日、偉大なフリのの坐り込みストライキ——20世紀史上、アメリカ労働間のもっとも記念すべき重大な対決——が始まった。次の6週間、フリのの新聞、ニュース映画、ニュース放送は重苦しい物語で一杯だった。フリのの事件は、アメリカ労働者の新しい戦闘精神——労働と資本間の根本的な変化を生みだした大衆運動——を劇的に示した。自動車工業に組合を組織するという労働者の目標に共鳴する人々にとって、無謀とも思える若いUAWはGMという巨人＝ゴリアテに立ち向かうダビデであった。財産の尊厳を敬う者にとっては、UAWならびにその戦術は産業資本主義に対する急激かつ革命的な脅威であった。フリのの坐り込みストライキに関して中立的な観察者はほとんどいなかった。

UAWが巨人に遭遇したという事実には議論の余地がない。自動車製造業は全米でナンバー・ワンの産業であり、GMはナンバー・ワンの自動車メーカーであった。実際に、同社は世界最大の製造企業であった。1936年にGMはシボレー、ポンティアック、ビュイック、オールズモービル、ラ・サールおよびキャディラック合わせて150万台を販売したが、この数字は国内の乗用車市場の43%以上を表していた。GMは35の都市に69の自動車工場を有していた。ビジネス・アナリストたちはGM社長のアルフレッド・P. スロー

ン・ジュニアを天才とみなし、彼の会社がアメリカでもっともうまく経営されていると考えた。明らかにGMは、もっとも利益をあげている会社であった。すなわち同社は1936年に、14億ドルの売上高に対して2億8,400万ドルの税引き前利益を計上していた。このことは、同社の34万2,384人の株主にとって大いに満足できることがらであり、とくにGM普通株のおよそ4分の1を所有しているデュボン社——約4,500万ドルの配当金を受領——にとっては大満足のできるものであった。要するに、GMは産業資本主義の典型といえた。そして、それほど多くの金の卵を生み出す「現状維持」を保つために、企業内外双方からの圧力は凄まじいものがあった。

「現状維持」の1つの基底的な主義は、猛烈な反組合の立場であった。この点に関しては、GMは同業他社と完全に一致して行動した。1936年はアメリカ自動車工業の40周年記念の年であった。この40年間に、オープン・ショップ制が深刻な脅威にさらされたことはなかった。労働組合主義という概念は、自動車工業の総帥たちにとっては、まさに「のろい」であった。「ビジネスマンとして、私は労働組合主義という考えにまったく同調しなかった」と、アルフレッド・スローンは自分のメモに書いている。

大恐慌以前には労働組合主義は、実際に、デトロイトでは大した問題ではなかった。1920年代の自動車ブーム期に採用された大量の労働者軍——白人の薄汚い農夫、貧しい都市の住民、南部の黒人、近年の移民たち——は柔順で、労働組合の経験の有していなかった。労働上の何らかの不平・不満は、ほとんど他の産業よりも高い賃金支払い率や厚生資本主義——グループ保険、貯蓄計画、持家奨励制度、リクレーション設備などのようなGMが先駆をなしたもの——の制度によって解消されていた。オープン・ショップ制をとるデトロイトは、アメリカ最大の労働組合「アメリカ労働総同盟」(AFL)からほとんど脅威をうけなかった。職人志向的なAFLは水平的労働組合主義——例えば、産業のいかに問わず、機械工すべてを組織化する——に専念した。AFLは故意に、産業組合主義——自動車、鉄鋼あるいはゴムといった特定の産業の不熟練および未熟練労働者の垂直的組織を無視した。

その後、大恐慌があらゆるものを滅茶苦茶にした。デトロイトの自動車労働者たちは、1930年代初期に自動車工業が破裂した風船のように崩壊したとき、自らの無力さを感じた。厚生資本主義は職場の保障に関しては沈黙していた。賃金や労働時間に対して大ナタが振るわれた。レイオフが増えるにつれて、10年あるいは20年の経験を積んだ労働者でさえ、自分たちの先任権（シニオリティ）がとるに足らぬことを思い知らされた。また、1933年に始まった自動車販売の上昇を画した職場復帰においてすら、先任権は無力であった。組み立てラインは、生産性を向上させ利益水準を回復するために、情け容赦なくスピード・アップされた。端的にいえば、復職しても、出勤簿にパンチ・カードを打てば労働者はロボット以外の何物でもなかったのである。「組み立てラインは気力を奪い、スピード・アップはトラブルを起こす」と労働者は口々にいう。また彼らの妻たちは、「夫は、帰宅すれば、まるで死んだように疲弊し尽くしている」と証言する。

徐々にではあるが、自動車労働者たちは、組合主義を均衡を回復する唯一の希望とみなし始めた。この点で、彼らはニュー・ディールの中に光明を見出した。全国産業復興法（NIRA, 1933年）は労働者に団結権と団体交渉権を認めた。しかしながら、NIRAは労働者の希望をかなえるには基盤が余りにも脆弱であった。というのは、NIRAは経営者側に対して、ほとんど強制力をもたない上に彼らによって容易に回避されたからである。そして1935年に、最高裁はNIRAを違憲として葬り去った。

労働者の希望は、ニューヨーク州選出の上院議員ロバート・F. ワグナーの名に因んだ法律、すなわちワグナー法（正式名は全国労働関係法、NLRA）の通過によって再燃した。同法は全国労働関係局（NLRB）を設立させ、団体交渉権を強化させ、さらに経営者の妨害なしに組合を組織化する努力を認めた。

自動車企業は、最高裁がワグナー法を破棄するだろうことを期待して同法を無視した。自動車企業は最高裁の判決を待つ間にも、組合組織化努力を鎮静するために、しだいに労働スパイの活用を目を向けだした。もっとも悪名

高きスパイ・システムはフォード社のそれであった。同社では、労働争議に備えて雇われた暴力団がデトロイト郊外のディアボーンにある巨大なリバー・ルージュ工場において、恐怖の血の支配体制を敷いていた。

GMのスパイ網は荒々しくはないものの、広範囲にわたるものであった。ウィスコンシン州選出のロバート・M. ラフォレットに率いられた上院調査委員会によって集められた証拠によると、1934年から1936年半ばにかけて、GMは14より少なくない私立探偵社と契約し、99万4,000ドルを支払ったことを示している。その目的は組合同調者を探し出し、解雇することであった。ラフォレット委員会は次のように非難した。「あらゆるアメリカの企業において、いままでに考案された中でとてつもなく巨大なスパイ・システムが、労働者を恐怖のクモの巣に包み込んだ。恐怖が労働者のあらゆる歩幅をも速めさせ、注意が彼の言葉を覆いつつんだ。労働者は、いかなる意味においても、もはや自由なアメリカ人ではない」と。

〔II〕

このような荒波の中に、効果的な組合を進出させることはきわめて困難なことであった。1933年、NIRAの団体交渉部によって行動に移すことを促されたAFLは、UAWの設立を許可して、デトロイトの労働者の組織化を試みた。しかしながら、AFLが認知したUAWのリーダーシップは余りにも保守的すぎて、労働者に適しなかった。3年間の努力は、独立の自動車メーカーの間には少数とはいえ足場を構築したが、ビッグ・スリーにおいては、かろうじて「くぼみ」ができただけである。例えばGMのフロント工場では、1936年6月——偉大な坐り込みストライキのちょうど6カ月前——には全部で150人の組合費払い込み済みのUAW加盟員がいただけであった。

自動車労働者を組織化しようとする遅々とした努力は、AFL内で同胞が殺し合う闘争をもたらした。合同炭坑労組のジョン・L. ルイス、国際婦人服組合のデビッド・ダビンスキー、そして合同男子服組合のシドニー・ヒルマンらが提唱した産業別組合主義は産業別組織委員会、後に産業別組織会議

(C I O) を結成した。1936年の夏、C I OはA F Lから正式に脱退した。その時にC I OはU A W支部をも連れ出した。新しいC I Oの旗のもとに行進しながら、U A Wは自動車工業との闘争に備えた。それは産業別組合主義理論の最初の現代的な試練であった。

復活したU A Wは、その最初の標的としてG Mに照準を当てた。クライスラー社のウォルター・クライスラーは、自動車業界でもっとも労働者に理解のある大立物とみられていた。もしナンバー・ワンのG Mが征服されたならば、ナンバー・ツーのクライスラーも追随せざるを得ないだろう。フォード社を攻撃するのは難問であった。それに比べてG Mは、特に攻撃を受け易い弱点をもっていた。低価格車シボレー、中価格車ポンティアック、ビュイックならびにオールズモビルの全車体がフィッシャー・ボディ事業部で製造されていた。もし同事業部がストライキに突入すれば——労働者リーダーの誰もがそうなることを疑わなかった——、少数のフィッシャー・ボディ工場を選択して閉鎖するだけで、ただちにG Mを痛めつけることになるだろう。

ストライキが発生した時、G Mの根城たるフロントに焦点が当てられることは疑問の余地がなかった。フロントは1908年に、ウィリアム・C. デュラントがG Mを設立したところであり、G Mの自動車生産の中心地としての地位を保っていた。1936年のフロントは、人口16万人の小さな産業都市であり、G Mの諸施設でとり囲まれたデトロイトのおよそ60マイル北西に位置していた。フィッシャー・ボディ第1工場は南に、巨大なビュイック工場は北に、フィッシャー・ボディ第2工場ならびにシボレー複合体は東に、そしてA Cスパーク・プラグ工場は西に位置していた。町の給料取りの3人のうち2人——4万7,000人余——はG Mのために働き、5家族中4家族は、直接・間接に、G Mの給料支払いで生計を立てていた。経済的・社会的・文化的な生活のあらゆる側面はG Mを中心に回転していた。フロントは、まさに「企業城下町」(カンパニー・タウン)であった。

U A Wの最初の仕事は、後世の人々が意識的な精神高揚と呼んだものであった。老練な労働運動家のワインダム・モーティマーは、U A WがA F Lか

ら離脱しCIOに加入する以前でさえ、この仕事に着手していた。つまり、5つの弱いフロントの支部を1つに集結して「ローカル156」と称し、そこへ組合主義の種を植え付けていたのである。しかしながら、1936年10月に、物静かでハード・ワーカーのモーティマーは、より風采のよくて、精力的なオルグである27歳のボブ・トラヴィスにとって代わられた。トラヴィス側にはロイ・ルーサー——ヴィクターとウォルターの兄弟——がおり、彼はUAWの支配的実権を握るようになった。ドイツ移民の息子ルーサー兄弟は、ヴィクターの言によれば、「労働運動の真只中に生まれた」のである。野心家ロイ・ルーサーはトラヴィスと強力なパートナーシップを結んだ。

労働スパイが横行する恐しい「カンパニー・タウン」フロント——そこでの唯一の安全な話題は、モーティマーによると、「スポーツ、女性、ワイ談および天候のみ」であった——において、敵対的な経営者に直面しながら、UAWのオルグたちは労働者の家や秘密の会合で多くの組合員を獲得するのに成功した。労働者の不平を公表したり、UAWの主義・信条を広めたりする運動に労働者の妻たちを巻き込むために多くの努力が費された。そして、フロント中のGM労働者を勧誘するためにトラヴィスとルーサーは、フロントの2つの主要工場であるフィッシャー・ボディ工場の従業員に焦点を合わせた。彼らの努力は、11月の大統領選でフランクリン・D. ルーズベルトの圧倒的な勝利によってより容易になったが、労働者はこの選挙をワシントンからの支援の吉兆だと受けとった。

12月末までに、「フロント・ローカル156」はフロント市のGM労働者の10%の署名を集めた。それはスパイの裏をかいて秘密裏になされたが、署名者の大半はフィッシャー・ボディ第1および第2工場の労働者であった。12月22日、GMの経営執行副社長ウィリアム・ヌードセンは、UAW議長ホームー・マーチンと会談して組合の承認、職場の保障、賃金支払い率、先任権ならびにスピード・アップといった問題は「全社規模的な問題である」として話し合いを拒否した。「GM本部はそのような問題に関与しない。それらの問題は個々の工場マネジャーによって、ローカル・レベルで解決されるべ

きである」と、ヌードセンはおごそかに宣言した。マーチンは、GM側のこの説明が完全な「絵空事」であると認識した。GMがワグナー法に服従したり、また、いかなる独立の組合とも真剣に交渉する意図をもっていないことは明白であった。ストライキのための舞台が設営された。

〔Ⅲ〕

しかし、どのような種類のストライキ戦術をとるのか？ フリントの年配の労働者たちは、1930年にフィッシャー・ボディ第1工場を閉鎖しようと試みたものの、それがミシガン州警察に唆かされた当地の法律家によって叩きつぶされたことを記憶している。ピケット（見張り人）が配置されたものの多くの役人によって打倒された。ストライキ・リーダーは逮捕され、解雇されてしまった。フリントのUAWの幹部たちの中で、4,500人そこそこの組合メンバーがGM帝国の中核地において、紋切り型のピケット・ライン・ストライキを長期にわたって支え切れるなどと考えたものはほとんどいなかった。その解決策はまったく異なった種類のストライキ——坐り込み——にあった。

その戦術は巧妙ではあるが、単純であった。ストライカーたちは仕事はしないが、仕事場から立ち去るのではなくて機械の側にとどまり、そして自分たちの要求を強く主張するために、会社の価値ある貯産を、一種の「人質」としてとるわけである。坐り込みは警察に対するその行為において、工場外のピケットに比べれば非難されることが少なかった。おまけに坐り込みは、生産を回復するためにストライキ破りを導入するという、経営者側の主要な武器を無力化した。通常ストライカー以上に、坐り込みストライカーは自らの闘いを経営側に向けることを好むようになった。

坐り込みは決して目新しいものではなかった。幾人かの研究者は、その起源を古代エジプトの石工にまでさかのぼることができると主張している。しかし、坐り込みの初陣は1920年代と30年代のヨーロッパにあるとみるのが妥当であろう。イタリアの金属労働者、ウェールズの石炭労働者、スペインの

銅坑労働者、ギリシャのゴム労働者がそれぞれ職場で坐り込んだ。そして、1936年春のフランスにおける大々的な坐り込みが全国規模のゼネラル・ストライキの嚆矢とみられる。アメリカでは、1936年に48件の坐り込みが発生したと労働統計局が報告している。自動車労働者によってもっとも注目された坐り込みは、インディアナ州サウス・ベンドのベンディックス・プロダクツ社（同社株式の一部をGMが所有）と、デトロイトの2つの部品メーカー——ミッドランド・スチール・プロダクツ社とケルシー・ヘイズ車輪会社——におけるものであった。これら3つの坐り込みはともに、限られた範囲ではあるが、労働者に勝利をもたらしてUAWの闘士に感銘を与えた。とはいえ、この時点まではアメリカの坐り込みストライキは大きなバクチを打ったことはなかった。

フロントのフィッシャー・ボディ第1工場の熱狂的な組合組織化努力の真只中で、バド・シモンズというショップ・スチュワードは彼の配下の組合員たちがストライキに入る用意ができていのかどうかを尋ねられた時、次のように叫んだ。「用意ができていって？妊娠十カ月の婦人と同じだよ」。しかしながら、フロントの闘士たちはクリーブランドのフィッシャー・ボディ工場の闘士たちに人気をさらわれた。1936年12月28日、クリーブランドのフィッシャー・ボディ工場が坐り込みによって固く閉鎖された。フロントでは、ボブ・トラヴィスやUAWのオルグたちがストライキの口実を必死に思案していた。

GMがスタンピング用ダイスをフィッシャー・ボディ第1工場から他工場に移転させようとしているという12月30日の報告は、ストライキ突入の理由に十分であった。「オーケー、こいつはピッタリだ」、トラヴィスは幸せそうに叫んだ。その日の深夜までに、午後の交代労働者は巨大な工場を完全に占拠した。2マイル離れたところにある第2工場もまた、坐り込みストライカーによって乗っ取られた。新年が始まった時、GMの「稼ぎ手」シボレーとビュICKの生産がとまった。間もなく、他のGM工場にストライキの影響が出はじめた。というのは、フロントのフィッシャー・ボディの2工場なら

びにクリーブランドの1工場の占拠は、GMの乗用車生産の優に75%を中止させる力を持っていたからである。坐り込みストライキは、ダビデ（＝ストライカー）がゴリアテ（＝GM）に立ち向かうための強力な武器となった。

次の数週間にわたって、ストライキは12以上の他のGM工場を閉鎖することになる。部品不足が、多くの一連の工場閉鎖を余儀なくさせた。遊休労働者数は13万6,000人に達した。けれども終始、スポット・ライトはフロントにあてられた。ストライキの成功あるいは失敗——ストライカーたちにとっての成功は、経営側がUAWを独占的な交渉機関として認めること以外のなものでもないことを意味した——は、GM帝国の中心地「フロント」で決定されるだろう。

〔IV〕

坐り込みストライカーたちは自らを軍隊の規律で組織しはじめた。ストライキに参加しない全労働者（ならびに全婦人労働者）が工場を離れてしまうと、両工場にはバリケードが張り巡らされ、パトロール隊が組織された。ストライカーの1人は次のように述懐している。「それは、まさに我々が要塞をもっている兵士のものであった。それは戦争のものであった。私と行動を共にした連中は私の相棒になった」。ストライカーは全員、防衛、炊事、清掃およびリクレーションといった役割を分担するために委員会を組織し、規則正しく日々の勤務に従事した。訓練は厳格であった。

ストライキ・リーダーたちは、この坐り込みが決して暴徒による武力乗取りではないことを大衆に示さなければならなかった。占拠された工場の周りをうろついているニュース・レポーターやその他の観察者は、ストライカーの中には血走った目をした狂信者がいないと論評した。「我々はここで、自分たちの仕事を防衛しているだけだ。我々は工場を経営する意図もなければ所有するつもりもない。しかし我々は、誰かが我々の仕事を奪い去るのを見たくない」と、フィッシャー・ボディ第2工場の1人のストライカーは『ニューヨーク・タイムス』の記者に語った。

ストライキ委員会規則に「少し違反した者」には掃除当番か炊事当番が割り当てられる。「著しく違反した者」——例えば銃やアルコールの所持、会社財産の破壊など——は、工場から追放されることになっていた。24時間営業の食堂が工場のカフェテリアの中に設営された。そして、自動車のシートやボディなどから簡易宿泊施設が作られた。

〔V〕

坐り込みストライカーを新しい6時間の「労働シフト」(清掃などの義務)にとどめておくことは容易であった。しかしながら、義務時間外を充実させ、士気を高揚させておくにはかなりの才覚を要した。防衛委員会は棍棒や警棍を作るための生産ラインを設けた。トランプ、チェッカー、ドミノなどに多くの時間が費やされた。新聞や雑誌類が継続的に工場内に届けられた。UAWの講師たちは議会の手続き、団体交渉、さらには労働運動史について語った。即席のバレー・ボールやピンボンのゲームがあり、またあちこちで、遊休化した機械の長い列の間でローラー・スケートに興ずる労働者もみられた。素人劇——そこでは、熱狂とシャガレ声のユーモアが演劇の技術を上回っていた——が陽気な、ひやかしの観客相手に演じられていた。組み立てライン方式による大量生産を風刺したチャーリー・チャップリンの映画、『モダン・タイムス』は熱狂的に受け入れられた。バンジョ、マンドリン、ハーモニカなどを演奏している人々は即興的なコンサートを催し、ほとんどすべてのストライカーはコミュニティの歌を唄いはじめた。そして時には自らの叙情詩を作った。

「オー、スローンさん！オー、スローンさん！

あなたの心は石でできている。

でも、組合はとても強いので、我々はストライキを続けるぞ。

そうですとも、トラヴィス同志！

ほんとうですよ、スローンさん！」

フィッシャー・ボディ第1工場と第2工場の坐り込み人口は、6週間のストライキの間に大きく変動した。「ローカル156」は工場への出入りの交通を維持する一助として、外にピケット・ラインを設けた。それは坐り込みストライカーが友人や家族を訪問するのを可能にした。

第1工場のストライカー数は、多い時のおよそ千余名から少ない時の90名に激減した。また第2工場でも、多い時の450人から少ない時の17人にまで変化した。第2工場のストライキ・リーダーたちの悩みの種は、ストライカーの中に既婚者が数多くいることであった。ストライキが長引くにつれて、家族の幸福・安寧に対する関心が彼らの心の中に侵食していった。『ニューヨース・タイムス』の記者の言によれば、フィッシャー第1工場は「頑丈で、勢いのよい」独身者の割合が多く、ストライキの圧力に耐えることができた。解決の希望が大きくなったり小さくなったりするにつれ、ストライカーの人数は変動した。そして、坐り込み人の数が危険水準にまで減退すれば、UAWはデトロイトやトレドから補強のために地方の闘士を呼び寄せた。そのようなグループの到着がバド・シモンズをして、次のようにいわしめた。「私は生涯において、流血に対してこれほど用意周到な連中を見たことはない」と。

しかしながら、総体としてみれば、坐り込みストライカーたちは著しく強い共同体意識をもっていた。しだいに増大していく自己評価が、労働者のストライキに対する関わりの度合を強くした。労働運動史家シドニー・フェインは次のように述べている。「彼らは、非人間的な産業機械の容易にとりかえられる歯車からアメリカ労働史のヒーローにかえられた」のである。

その間、工場の外ではボブ・トラヴィスやロイ・ルーサーがフロントの下町のベネジェリー・ビルにストライキ本部を設営した。そこは人の集結する場所であり、ストライカーやボランティアの助力者と共に解放を訴え、支援を動員し、戦略の想を練った。もっとも緊急を要する問題は食糧であった。

『フロント・オート・ワーカー』紙の編集者ヘンリー・クラウスの妻ドロシー・クラウスは、第1工場近くのレストラン——所有者が組合に譲渡した——

にストライキ用台所を設置した。食糧は1日3回そこで準備され、そして大きなヤカンに入れられて組合の厳重な警護の下に工場に搬入された。

食糧品は、ストライキ支援者あるいはボイコットの脅威のために、そうすることを余儀なくされたフロントの商人によって購入された。およそ200人もの人がストライキ・キッチンを維持・運営するために参加した。その多くは坐り込みストライカーの妻たちであった。また妻たちは「婦人補助部隊」や「婦人緊急隊」をも結成した。ヘンリー・クラウスの新聞『フロント・オート・ワーカー』や、ミシガン大学の学生ボランティアの発行する謄写版刷りの『パンチ・プレス』はストライカーに情報を提供した。拡声器付きの自動車が、断片的ではあったが、坐り込み人に対する伝達役を務めた。工場の外のピケット・ラインは道徳的支援を与えた。

GMは、そのスパイ網にもかかわらず、坐り込み戦術によって不意打ちを食わされた。最初、会社側は両工場への暖房や照明を断続的に切断してストライカーを困らそうと試みたが、彼らを餓えさせたり凍えさせたりすることは、かえって暴動に追いやることになりはしないかと恐れた。

危機に対処する方策を討議する中で、GMはミシガン州の法令集には労働者による会社財産の平和的占拠を禁止する条項がないことを発見した。家宅侵入法も大して役に立たなかった。つまり、労働者は経営者の「招待」によって工場に入ったのであるから、「家宅侵入」は合法的なのである。にもかかわらず、GMはただちに裁判所に訴えた。すなわちGMは、1937年1月2日、ストライカーがフィッシャー・ボディ第1工場および同第2工場を占拠していることを差し止めする訴訟＝インジャンクションを行ったのである。郡巡回裁判所のエドワード・D. ブラック判事(83歳、長年にわたるフロントの住民)は、同日、そのインジャンクションを認可した。

その結果、大いに困ったことが生じた。GMが性急にブラック判事に訴えたことは失敗であった。1月5日、UAWは記者会見を行い、差し止め・退去命令を発したブラック判事は「非倫理的行為」の罪があると攻撃した。というのは、ブラック判事は市場価値で22万ドル相当のGM株式3,665株を所

有していたからである。その後、一連の騒動の中でブラック判事のインジャンクション令は死文と化した。第1ラウンドはUAWのものであった。

〔VI〕

第2ラウンドでは、コミュニティ（坐り込みストライカーの共同体）が抵抗しえないほどの圧力をみることになる。

1月5日、GMのスローン社長は全従業員に向けて公開状を発表した。「労働組織がGMの工場を運営するのであろうか。それとも経営者が経営し続けるのであろうか。諸君は坐り込みストライキ、すなわち広範囲にわたる脅迫によって仕事から無理やり引きはなされている。諸君は、団体交渉に対しては労働組織のメンバーでなければならぬといわれている。しかし、迷わされてはいけぬ。いかなる組合も、またどのような労働独裁者であれ、GMの工場を支配する懸念はない。GMの労働者は仕事を得るために、あるいは仕事を維持するためにいかなる組織にも加入する必要はない。」

会社側の計算では、フロントの労働者の5人のうち4人までが仕事に戻りたがっていた（ただ、GMのフロント中の工場のうち、ACスパーク・プラグだけが依然としてフル稼働していた）。UAWは、GMによる強制や脅迫がこのような会社忠誠心——5人のうち4人までが職場復帰を希望していること——を生みだしたと非難した。真理は双方のどこかにある。シドニー・フェインが指摘するように、フロントには「ミドル・グループに属する多くの労働者が存在している。彼らは怠けるよりは仕事をするを好むが、とはいえ、闘争のどちらの側にも与せず、自分たちにとって最良の利益がどこにあるかを決定するために、結果を待っている」のである。

スローンの公開状の2日後の1月7日に、地方の実業家であり、元市長であったジョージ・E・ホイセンが「我々の職場、家庭ならびに社会を守るフロント同盟」の結成を表明した。メンバーは全フロント市民に開かれており、1週間も経ないうちに、ホイセンはおよそ2万6,000人が署名したと主張した。GMがフロント同盟に資金援助をしたという確かな証拠はないが、

会社の息がかかっていることだけは明らかであった。UAWは関心をもってフロント同盟を観察した。その結果、それは占拠された工場に対してストライキ破りを組織化する、もしくは暴動をひきおこすGM傘下のグループである、と断定した。

フロント同盟は、「少数の闘士による多数の抑圧」だとするストライカー非難のキャンペーンを行った。さらに、次のような声明も発表した。「『外部の扇動者』の存在がGMファミリーを崩壊させる』坐り込みは資本主義体制に脅威を与える『共産主義者の陰謀』である」と。後者のキャンペーンは、きわめてしつこい非難であった。私有財産の奪取は共産主義者のお気に入りの戦術であり、自動車労働者の組合は過激な共産主義者とともに陰謀をたくらんでいるといわれた。

あと知恵が、この共産主義者謀略説を拡大した。というのは、ワインダム・モーティマーやボブ・トラヴィスのような有名なUAWのリーダーやフィッシャー・ボディ第1工場のストライキ委員会の委員長バド・シモンズたちは、事実、後年いろいろな共産主義あるいはその前衛に参加したからである。1937年以後の10年間、UAWは組合員のなかで共産主義者の問題をめぐってケンケンゴウゴウの論議を尽くした。

しかしながら、フロントの坐り込みは、共産主義的イデオロギーや共謀に忠誠を誓う反乱ではなかったことは確かである。坐り込み人は、抑圧的な労働条件によって絶望の淵にまで追いやられた人々であり、また労働者に対する経営側の態度に改善の希望がみられないことを確信した人々であった。

〔VII〕

フロントでは緊張が持続した1937年1月11日、ストライキに突入して13日目、暴動が発生した。その日の昼ごろ、GMは突然に、フィッシャー第2工場への暖房を切った。同工場は約100人の坐り込み人が2階を占拠していた（2マイル離れたところに位置する、より強力に要塞化された第1工場とは異なって、第2工場の1階と正門は会社側の警備員に支配されていた）。そ

の日は寒く、湿っぽく冷たい日で華氏16度位であった。午後になると、工場近辺には異常なほどの数の警察の車がみられるようになった。夕方6時、ストライカーの夕食が第2工場の正門にまで配達された時、ガードマンがその搬入を阻止した。8時30分、ヴィクター・ルーサーが組合の宣伝カーに調査に行かせたところ、寒くて空腹のストライカーは「快適な雰囲気ではない」ことを知らされた。坐り込みストライカーと外のピケットが団結して正門を奪取することが決意された。

手作りの棍棒で武装したストライカー部隊は、正門を固めている会社側の警備員のところに押しかけ、鍵を要求した。拒否された時、1人のストライカーが叫んだ。「地獄へ連れて行け！」ガードマンは工場の婦人トイレに逃げ込み、中からロックした。警備長がこの仔細をフロント警察本部に電話をして、自分の部下たちが脅迫され、「とらわれた」と報告した。それをきっかけにして警察の車がやってきた。そこには、約30名の武装した市民が同道していた。警官は工場の入口を襲撃して窓を打ち破り、そして内に向かって催涙ガス銃を発射した。ストライカーたちはビン、岩、ナット、ボルト、重い鋼鉄の自動車ドア用蝶番などを投げつけ、さらに工場の消火用ホースで水を撒くなどして対抗した。このストライカーの反撃で、攻撃者たちは再武装するために撤退し、援軍を待った。坐り込み人たちはその小休止を大いに活用した。すなわちドア蝶番やその他多くの「人気のある軍需品」を工場の外のピケットに手渡し、自分たちは工場の屋根の見晴らしのよい有利な地点に殺到した。

間もなく、警官が第2回目の攻撃をしかけてきた。催涙ガスを打ち込んだり、手榴弾を工場の窓を通して、また外のピケットの間をぬって投げ込んだりした。しかし今やピケットがその闘いに参加したために、ストライカーの防衛力は倍加した。消火用ホースで倒された警官もあれば、蝶番、ミルク瓶、レンガ、屋根瓦などで打ち倒された警官もあった。郡治安官の車はひっくり返された。その車から治安官がのそのそ這い出てきた時、蝶番が彼の頭に命中した。催涙ガスのため坐り込みストライカーは息苦しくなり、嘔吐

し、半分盲目になった。坐り込み人の中から死者が出た。ついに、ずぶ濡れで血まみれになった警官たちが消火用ホースの水で凍てついた道路をころびながら逃げだした。誰かがこの闘いを「ランニング・ブルの闘い」と命名した。

失敗し、恥をかかされた警官は突然立ち止まり、ストライカーを追いかけてピストルや散弾銃を発射した。その時はストライカーたちが退却のため警官に背中を向けている時であり、ケガ人を運んでいる時であった。13人が銃で傷つき、12人が散弾銃で撃たれ、1人がピストルの弾を受けて腹部に重傷を負った。警官もまた11人が傷ついた。大半は頭に重傷を負ったが、1人は撃ち損じた警官の弾で足に傷を負ったものである。遠くの丘まで退却した警官は工場のストライカー目がけて狙撃を開始したが、彼らの弾は壁ではね返ったり、窓でさえぎられたりした。毒々しい催涙ガスが凍りつくような戦場に漂った。銃声や騒ぎ声の中をぬって、ストライカーに防衛を指揮し、素早く立ち上がるよう叱咤激励するヴィクター・ルーサーの大声が組合の宣伝カーの拡声器を通じて流れてきた。ついに、会社側による奪還の努力が失敗に終わったことが明白になった。負傷者を運び出すために救急車が到着した。深夜になって狙撃はやんだ。そして、闘いは坐り込みストライキを新しいコースに向けさせた。

〔VIII〕

ランシングにある州議会からフロントに急行していたミシガン州知事のフランク・マーフィーは、合衆国軍隊と州警察に出動命令を下した。マーフィーは断言した。「争いは再び起こらない。平和と秩序が回復するだろう。フロントの市民が恐怖におとし入れられることはない」と。1月13日までに、フロント市にはおよそ1,300人の警備兵が結集していた。ストライキが終わるまでにはその数はさらに2,000人増えた。UAWが非難しているように、フィッシャー・ボディ第2工場の奪還の試みをGMが指揮したか否かは議論の余地があるが、マーフィーの行為は、警官による暴行は坐り込みストライ

キを「解決しない」ことを保証するものであった。

組織労働者は軍隊と州警察を恐れたが、それには理由があった。すなわち、それらは過去において、しばしばストライキ破りのために利用されたからである。ところが今回の場合には、組合は軍隊や州警察の到着を歓迎した。なぜならば、組合はそれらを派遣した人物を信頼していたからである。実際に、坐り込みのタイミングは1937年1月1日の民主党のマーフィー知事の就任式までとめられていた。マーフィーは労働者の強力な支援によって知事になった。彼は選挙戦のキャンペーンで、「私は労働運動に熱心です」と宣言していた。後にワインダム・モーティマーが述べたように、「マーフィーが我々の側に加担するかどうかは判らないが、少なくとも彼は我々に歯向かうことはないだろうと感じた」のである。

それは正確な評価であった。マーフィーは財産権の侵害としての坐り込み戦術を容認していなかったが、団結権についてははっきりと承認していた。結局、マーフィーはフロントの一触即発的な雰囲気をも霧散させ、会社と組合の双方を交渉のテーブルにつかせようと決意した。最初、マーフィーは素早くかつ輝かしい大成功をおさめるかのようにみえた。1月15日、「ランニング・ブルの闘い」の4日後にマーフィーは停戦を公表した。組合はフィッシャー・ボディ第1工場および第2工場を明け渡すことに同意した。そしてGMは、「誠意をもって」交渉中は生産は再開しないと表明した。ところがGMが第三者として話し合うために、フロント市の遊休労働者の「最大多数」を代弁しているというフロント同盟を招いたとの情報が漏れた。ストライキのリーダーたちは、これはUAWの承認を勝ちとることに対する挑戦だとみてとった。組合は「GMの裏切り」を非難し、休戦をとり消した。

膠着状態が続く情勢が険悪になった時、新しい人物たちがフランク・マーフィー側に参加した。GM側では経営執行副社長のウィリアム・ヌードセン——いかにストライキが終結されるかよりも生産に関心を示す、こけおどしのにわか作りの生産の天才——、デュポン社の財務専門家のドナルドソン・ブラウン、そしてGMの弁護士のジョン・T. スミス。組合側にはUAW会

長のホーマー・マーチン——福音主義的な話し家だが交渉下手——やC I O会長のジョン・L. ルイス——フロントの坐り込みを産業別組合主義を改革する突破口にすることを決意——。

ルーズベルト政権の労働長官フランセス・パーキンス女史は、ルイス（組合）とスローン（会社）を交渉の場につかせてストライキを終息させようと試みた。管理者としての卓越さのゆえに、GM社長のスローンはおもしろみのない個性の持ち主にきれ、そして芝居じみたルイスを好まなかった。さらに、ニュー・ディールに対して感じた強い嫌悪感が経営管理法をむずかしいものにさせた。ついにスローンは、ストライキに関する交渉の中止を宣告して、ルーズベルト大統領とパーキンス労働長官をおこらせてしまった。スローンが固執した点は、「法律あるいは正義を考慮せずに工場を占拠しておいて身代金を要求する不埒な輩」と交渉したくないということであった。それに対してルイスは、全米中に広言した。GMの目的は「労働と法律の組織的な挑戦にどのように対処するかを同盟（GM・デュボン関係）と協議するために」、ニューヨークに「逃亡」することだと。GMは援軍を得なかった。

〔IX〕

実際に、GMは世界最大企業として期待されたほどの強力な支援を得ることができなかった。ワグナー法の軽視、ブラック判事による差し止め・退去命令の大失敗、「ランニング・ブルの闘い」の暴動などは、GMのイメージ・ダウンこそもたらしたが、益するものは何もなかった。繁栄を享受しているGMの財産権に対する坐り込みの脅威に関する強力で広範な大衆の関心にもかかわらず、1月31日に公表されたギャラップ世論調査では、会社側の支持は53対47で組合支持をわずかに上回っていたにすぎない。明らかに、「経営者側の妨害なしに団結し団体交渉する権利を！」という組合声明に対して、かなりの同情票があった。『ビジネス・ウィーク』誌は、大衆の見解を次のように分析した。「ストライカーにとって坐り込むことは権利ではないし、会社にとってストライカーを放り出すのも権利ではない」と。

フリント市のブルー・カラー労働者は非常に苦しんでいた。1月20日までは、フリント市のGM労働者の88%以上が失業していた。失業救済名簿は大恐慌期のそれよりも大きかった。GMもまた苦しんでいた。同社の1月の生産台数はちょうど6万台であった。予定台数は22万4,000台であった。けれども、双方ともに後にはひかなかった。緊張が再び高まり、1月25日にインディアナ州アンダーソンのGM工場で、そして2日後の27日にミシガン州サギノー工場でそれぞれ暴力事件が発生した。その後、坐り込みを頂点にまで押し上げる2つの事件がおこった。

1月28日、GMはまたもや訴訟に持ち込んだ。すなわち、ストライカーを完全に撤退させるための2回目の差し止め・退去命令申請である。今回はGMは、巡回裁判所判事のポール・V. ガドラ——彼は清潔であった——に目を向けた。その間、フリントのストライキ・リーダーたちは、かなりドラマチックな動きを計画した。

イニシアティブを取り戻し、そして坐り込みによって占拠された財産が安全でないことをGMに示威するために、トラヴィス、ロイ・ルーサーならびにその他のUAWの戦略家たちはフリントのシボレー第4工場——全シボレー車用エンジン生産工場——の占拠を企画した。彼らの計画は大胆不敵なものであった。というのは、そのエンジン工場はGM警察によって厳重にガードされていたからである。会社側のスパイと目されている労働者の聞こえるところで、ストライキ・リーダーは「秘密だが、我々の次の目標はベアリング工場のシボレー第9工場だ」と語った。会社がエサに食いついた。2月1日、組合のけん制的な試みがシボレー第9工場で行われていた時、GMは召集できるすべてのシボレー警備員によって対処しようとした。

催涙ガスや野蛮な棍棒を振りまわしての乱闘の後に、組合員たちは、一見、敗北に追い込まれたようにみえた。しかしそれは一種の陽動作戦であり、シボレー第9工場で行われている間隙について、他のストライカーが300ヤード離れた無防備の、巨大な第4工場を占拠した。「我々はGMの主要工場を手中におさめた。我々は、GMが絶対にできないと豪語していた

ことをやりとげたのだ」と、坐り込み人の1人が妻宛に手紙を書いた。彼は正しかった。シボレー第4工場の占拠という輝かしい偉業がターニング・ポイントとなった。

今や事態は急速に、UAWとGMが交渉のテーブルにつく方向に進展していった。2月2日、ガドラ判事は退去命令を出した。「24時間以内にフリントのフィッシャー・ボディ工場から撤退すること。もしUAWがこれに服さないならば、1,500万ドルの罰金を科す」というのが、その内容であった。ガドラ判事のインジャンクション令はUAWに対して交渉につくよう圧力をかけた。それはまた、マーフィー知事に対しても早急にストライキを終焉させる処方を見つけるよう圧力をかけた。ミシガン州の最高行政官としてマーフィーは、退去命令をいかにして実施するか、いつ効力を発揮させ、さらにはどのように法律を順守させるかの決断を迫られた。GMにしてみれば、2月3日のフィッシャー・ボディ第1工場外の組合員による熱烈な支援声明は、坐り込み者たちを追い出そうとする試みは何であれ、ある程度の流血惨事をひきおこし、ひいてはもっとも重要な工場のうち3つの破壊につながる恐れがあった。GMは「おてんばの処女」のように、しぶしぶ団体交渉に応じた。

話し合いはデトロイトで行われた。GM側からヌードセン、ドナルドソン・ブラウン、ジョン・T. スミス。組合側からはジョン・L. ルイスが率いてCIOの顧問リー・プレスマンとUAW会長のホームー・マーチンが出席した(ただし、マーチンはすぐに交渉不適格者として更迭された)。マーフィーは主たる交渉者のようにふるまった。そして解決策を求めて、GMとUAWの間を「大うさぎのように」行ったり来たりした。賃金や労働条件のような特殊な問題については、後日、交渉することで合意された。UAWは工場占拠を解き、これらの諸問題が審議されている間は仕事に戻ることに同意した。GMは坐り込みストライカーたちをペナルティや偏見なしに復職させることに同意した。最大の争点は、UAWを唯一の交渉機関として承認するかどうかにあった。

交渉の過程で、重苦しくのしかかっているのはガドラ判事の退去命令であった。そのインジャンクションを実施に移すのに軍隊を利用するという会社側の主張がルイスを怒らせてしまった。ルイスはマーフィーに向かって、「私は明朝、個人的にシボレー第4工場に入りましょう。私は坐り込みストライカーたちにあなたの命令を無視しないように伝えましょう。それから私は工場の最も大きな窓のところにいき、それを開け、外套を脱ぎシャツをとり、そして裸になりましょう。その瞬間に、あなたは軍隊に撃つように命じなさい。軍隊の銃弾が当たる最初の胸は私の胸だ」と宣告した。実際には知事は、ガドラ判事の命令を軍隊の武器を用いて強行する考えなどもっていなかった。「私は『血塗られたマーフィー』などになりたくない」。しかしマーフィーは、組合が譲歩しない限り、占拠された工場への食糧搬入を阻止しようガードマンに命じた。GMも痛ましいほどの経済的事実によって譲歩を余儀なくされた。2月の最初の10日間で、全米最大の自動車メーカーがたった151台しか自動車を生産できなかったのである。

〔X〕

ついに2月11日未明の2時35分、16時間に及ぶ、ヘトヘトになるような最終的な交渉の結果、44日間にわたったフロントの坐り込みストライキが終結した。合意はストライキに入っていた17工場のみに適応されたが、これらの工場はGMのもっとも重要な工場であった。体面を保つ態度から、GMは組合の承認を明確に述べる必要はなかったが、事実上、組合は承認された。UAWは、代表者選挙前に自動車労働者の署名を集めるのに、6カ月間の猶予期間をもっていた。この間、会社側はそれを妨害したり、あるいは他の労働団体と取引することはできなかった。GMの交渉者の1人のスミスが、「ルイスさん、あなた方は我々を打ちまかした。しかし、私はこのことを決して忘れませぬぞ」とすごんでみせた。生産マンであるヌードセンは恨みをもたなかった唯一の人物である。「私たちは、平和に自動車を作ろう」と宣言した。

2月11日の午後遅くなって、坐り込み人たちが出てきた。歓声をあげる多くの支持者たちに囲まれたフィッシャー第1工場のストライカーたちは、フィッシャー第2工場ならびにシボレー第4工場の同志と合流するために、星条旗を掲げながら2マイル離れた町まで行進した。彼らはフロントの下町をたいまつでパレードした。彼らは行進しながら自分たちの賛歌を唄った。

永遠の団結!

永遠の団結!

永遠の団結!

組合は我々を強くする!

彼らが歌い、祝う理由はある。彼らは大勝利をあげたのである。自動車工業界のUAW支部は、組合加盟申し込みの労働者で溢れた。坐り込みが解決して8カ月後には、UAWの組合費支払いメンバーはおよそ40万人(5倍)に増加した。組合は、GM帝国の中心工場において、容易に代表選挙を勝ちとった。独立の自動車メーカー——パッカード、スチュードベーカー、ハドソン——もただちに組合を結成した。また主要な部品メーカーも組合を組織した。1937年4月、坐り込みの後、クライスラーもまた組合攻撃に屈服した。フォードはもっとも長く耐えたが、同社も1941年にはUAWを唯一の交渉機関として承認した。このことにおいて重要な要因を端的に表現すれば、1937年4月に、最高裁がワグナー法を支持する判決を下したことであった。経営側からの妨害なしに組織化できることが、今や合衆国の法律として確認された。

[Ⅺ]

しかしながら、UAWはその成功を優雅に処理するのに失敗した。その生誕以来、組合の諸問題に関する命令権限はバラバラで、統一がとれていなか

った。すなわち、その最も決定的な力をもつリーダー、例えば「フロント・ローカル156」のリーダーたちは底辺の出身であった。上層部での不和は、坐り込み期間中は団結を前面に出す必要から表面化しなかったが、勝利と共に顕在化してきた。第2次世界大戦後になって初めてUAWは、ウォルター・ルーサーの強力な指導下によりやく秩序を回復し、共産主義者たちを追放し、そして安定的成熟に達したのである。

ジョン・ルイスが予測したように、CIOについていえば、フロントの勝利は産業組合主義の入口に到達した。1937年3月の大鉄鋼業界で端緒を開いたCIOは、次から次へと基軸産業を成功的に組織した。合衆国の組合メンバーは1936年から1941年の間に156%も上昇したが、その大半はCIOが獲得したものである。

フロントの坐り込みは続々と追隨者を生みだした。1937年の初頭において、合衆国のあらゆる労働者——くず屋や犬取り人からじゅうたん職人やパイ焼き人にいたるまで——は同じ戦術を試みた。大衆のイライラが急速に高まった。多くのアメリカ人は次のようなUAWの議論を受け入れてきた。すなわち、「坐り込みは非妥協的なGMをして法律に従わせ、また団結権と団体交渉権を容認させるためのUAWがもつ唯一の武器である」と。そのような論議は、最高裁がワグナー法を支持した後には説得力を失ってしまった。今や、組織された労働者は、その背後の政府や法律によって経営者と同格であるとみられている。しだいに、坐り込みは無責任な行為として非難されだした。そして1939年に、最高裁が財産権の侵害だと坐り込みの実践を非合法化して以来、それはすたれてしまった。

フロントの坐り込みストライキの勝利は、けっして自動車労働者の不満に終止符を打った訳ではない。とはいえ初めて労働者は、自らを非人間的な機械のとるに足りない、単なる歯車であるよりは、何か異なったものとして心に描くことができた。「団結」を口にする時、組合は労働者を強くした。